会報

発行　印刷所　理科研究部
事務局　成田市幸町の48の1　成田川学校内

印刷所　理科研究部集会の感想

低学年部会に参加して
小高　和喜子

各部会ごとによく研究がなされ資料を用意し研究してきたことに感心させられました。発表の時に具体的な提示をされた部会があり、とても参考になりました。発表の仕方をもう少し工夫すると記憶力があがるように思いました。

まとまることなら、質疑を早くに打ち切ってもよいと思いました。そうすれば少しは前もって目を通し、当日のもっとよい発言ができるからです。

また、参加者側からだけの質疑をもっとのばし、もっと活発な意見が出たのではないでしょうか。

ご苦労さまでした。

低学年部会に参加して
向台小　高橋　和喜子

一人で教材研究をする。こんな素材の扱いでよいだろうか。疑問に感じる子を育てるにはどんな指導をすればよいか。いつも自然を見つめ、自然にはたらきかけていく子を育てるにはどうしたらよいだろうか。私の悩みはつきないのである。

こうやって他の研究の成果を聞かせていただくことは、とんな私にとって、とても有意義である。

確かなデーターに基づく委社市研究、理科の時間だけにとどまらず生活の中で育てていく発見学習、自分たちの身近な植物を用ろうとあいて作った資料、一人ひとりのノートを出させて、こういうもののよさをつかませたいと思ったのか、私自身まだまだ発想が貧弱だったと考えさせられた。例えば、「発見カード」や「ここのはたらき」を調べるポイントなど具象的な創意工夫の必要を痛感させられた。

その他、多様化することばかりで、有意義な一日であった。今後の実践に生かしていきたい。

高学年部会に参加して
向台小　吉野　博史

一部会は、児童の発想を生かし、発表を重視した一年目、発想の理論化の研究発表、野外観察に便利なライトブック作りなど一日でしたいました。共通の発表会だけにまず。

三部会は、発見カードの使用によって児童をより見つめながらなければならないことから観察力の向上を目ざした報告。四部会は環境石灰岩を通した考え方と育てる研究、教育の課題とテーマポイントの報告でした。

五部会は、大型の昆虫標本を使い「仮説を設定する観察・実験の工夫」というテーマで研究を進めてきましたが、初めての試みに苦心されたようです。

六部会は、「地球と宇宙」の研究発表でした。特に天体望遠鏡の自作の報告は、その事が興味深いものでした。

中学校部会に参加して
成田西中　小川　美喜子

共通事項の発表は、3年間の研究のまとめの発表をした部会のつもりで、全部会を聞かせていただきたいと思う。

理科の教師になる人は、共通理解に入るのか、はたまた理科室に入るのか、はたまた社会へ、ここへ理科室がなくなるのか、どちらか討論の段階で白熱した論議が展開されたのは印象に残りである。また、共通事項に先生方の悩みがあるのか調査項目的であったのは残念である。発表が少なければ、より基礎的な事柄に関する疑問が出されたにもよかったように思う。

ともあれ、理科研究部の伝統でもある「部会対抗」を今後もより一層つみあげるよう、今年度のまとめと共に、来年度の展望をもちたいものである。

助言者　感想

低学年部会
講師　主事　五味　建

研究主題の選定である。よい子の選定基準は、部会における先生方の現実的な問題点の集約という方法を採ったこと。その事が根底にはなければならないのは勿論であるが、更に、教育現場での指導法についてはその事が顕著である。

最後に、低学年とは、1年と3年では相当の格差がある。この二つの部会として扱うのは、どうもなじめない。特に指導法については、その事が顕著である。

高学年部会
主事　吉田　康彦

自然を調べる能力を身につけさせたいという先生方の願いが、実践や研究授業の中によく表われていた。特に教科書の開発主事は見るべきものがあり、児童の感性を啓発し、共感させながら自習の仕方を身につけさせるのに有効であると思われる。

各部会ごとに共同開発を進めることは大変に良い。ただし、共同研究の形態では個々の教員の研究のつまずきが不可欠である。研究のねらいとは、教材や教育の開発、児童を見る、調べ方、のしかた、みる観察する技術の分析、授業方法の改善、評価の研究、日常の実践の中から新鮮な問題を見出すなどが適切であると思われる。

なお領域「地球と宇宙」の研究発表である。特に天候や日の動きの観察方法や児童の自然観の研究が新鮮であった。

中学校部会
主事　吉田　康彦

共通事項の研究発表はずばり的を射た作品であった。作品というのは、三部会の十年、二・四部会の三年という長年にわたる積み重ねの重みもあるが、一・五部会のようにはやはりなかなか作品にも、取り組みに熱意が感じられることである。どの部会の研究も、研究員が夜遅くまで、事前を振り返り、討議をし重ねたであろう跡がうかがえるレポートであり、発表であった。欲を言えば、長年の積み重ねの成果を、初めての参観に役立てる工夫がほしかった。

また、発表を受けての討議を活発で、その内容も的を射ていた。残念ながら、熱論を発展させる時間のゆとりが無かったのが惜しまれる。

研究が、研究員一人一人を育てるという意義を持った研究会であった。